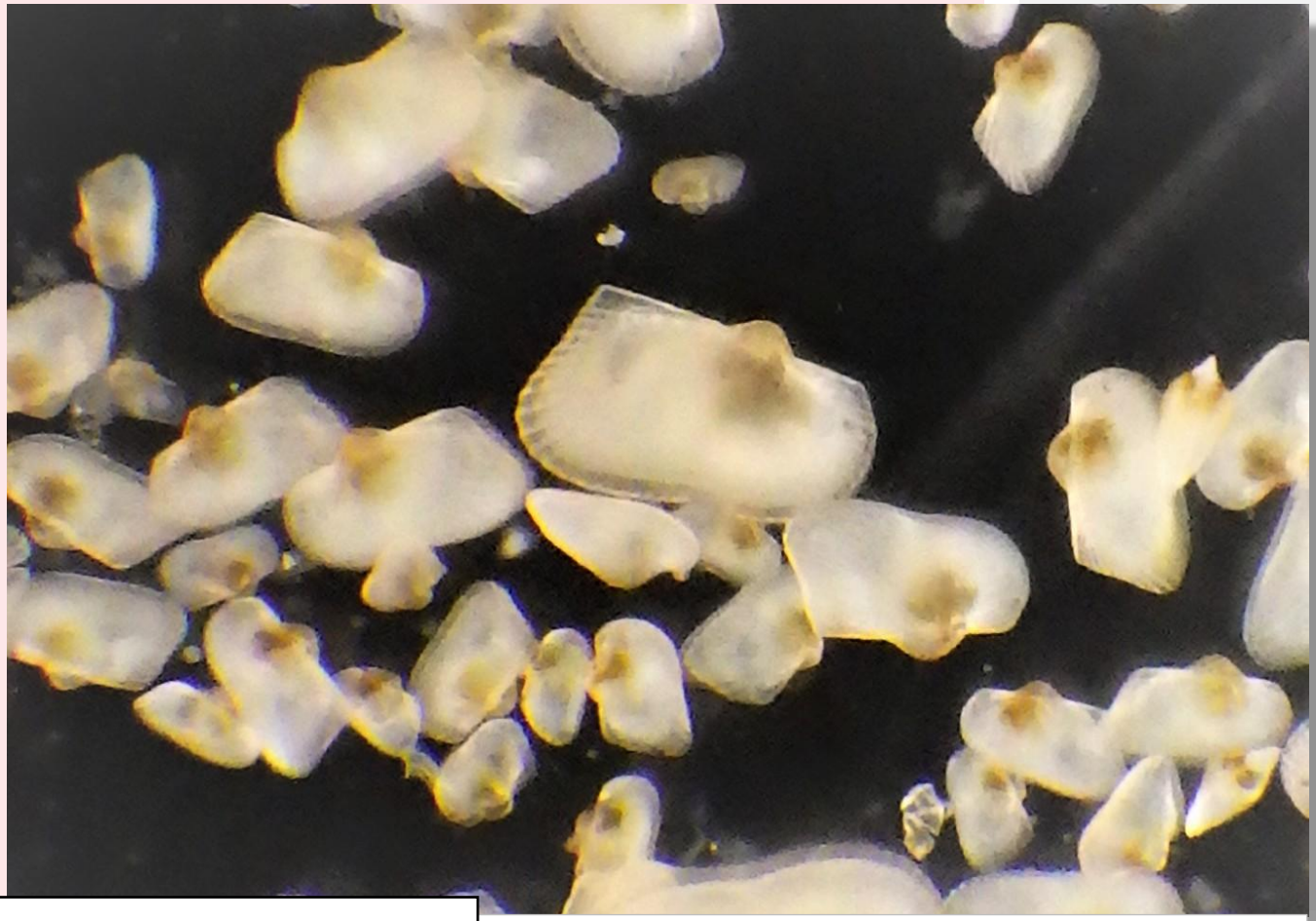
宮城県水産技術総合センターだより

2026年10月30日発行　第４号



アカガイの種苗生産について

宮城県水産技術総合センターでは、漁業者が持続的にアカガイ漁を行える環境づくりの支援の一環として、種苗生産に取り組んでいます。アカガイの種苗生産は十分な卵を得られるよう、親貝の飼育から始まります。成熟を迎えた親貝は、水温を上げるなどして人工的に産卵を誘発して採卵し、ふ化した幼生には、植物プランクトンを与え、水替えなどを行いながら約2か月間飼育します（写真の稚貝は大きいもので殻長１㎜程度）。生産した稚貝は漁業者へ出荷し、その後は数カ月、海での中間育成を経て、殻長２㎝程度に育ったのち、漁場へ放流され、今後の漁業資源として期待されます。　（第二養殖生産チーム）

目次

第Ⅲ期宮城県水産試験研究推進構想の見直しについて…… 1
研究内容の紹介
ホシガレイの循環飼育について（第二養殖生産チーム）…… 3
仙台湾周辺の異なる水深帯におけるマアナゴの生活史特性の変動（環境資源チーム）…… 4
宮城県内の河川におけるカワウの食性について（第一養殖生産チーム）…… 6
高水温耐性ワカメの試験養殖結果について（気仙沼水産試験場地域水産研究チーム）…… 8
普及情報
イワガキの人工採苗について（気仙沼水産試験場普及指導チーム）…… １０
アカモクの人工採苗及び養殖技術の普及（企画・普及指導チーム）…… １１
トピックス …… １３

「第Ⅲ期宮城県水産試験研究推進構想
～環境と調和した持続可能で活力ある水産業の確立～」
の中間見直しについて

企画・普及指導チーム　総括技術次長　伊藤　博

はじめに

県では、水産業の振興に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、平成１５年４月１日に施行された「みやぎ海とさかなの県民条例（以下「県民条例」という。）」に掲げる基本理念の実現に向け、「水産業の振興に関する基本的な計画（以下「基本計画」という）」を策定しています。

水産試験研究分野においても、基本計画を踏まえて「水産業試験研究構想（以下、「推進構想」という。）」を策定し、水産試験研究の取り組むべき方向を示し、効率的かつ効果的な試験研究を推進してきました。

「第Ⅲ期基本計画」は令和３年度から令和１２年度までの１０か年計画ですが、計画開始から５年目を迎えることから、この間の社会情勢変化等を踏まえ、計画の見直しを行いました。

「第Ⅲ期推進構想」も計画開始から５年目を迎え、この間、策定時に既に問題となっていた海洋環境の高水温化は、当センターが明治時代から江島で水温を観測してきた中で、令和５年７～１０月、令和６年１～５月に最高水温を記録するなど、さらに顕著となっています。また、令和５～７年の夏の平均気温偏差は３年連続で最も高い記録を更新し、内水面においても環境の変化が激しくなっています。

このような漁場環境の変化に対応し、「第Ⅲ期基本計画」の見直しも踏まえ、目指す姿の実現に向けて、より効率的かつ効果的な試験研究を推進していくために「第Ⅲ期推進構想」を見直すこととしました。

第Ⅲ期宮城県水産業試験研究推進構想の中間見直しの基本的な考え方

令和３年度から令和７年度までの第Ⅲ期推進構想における水産業試験研究の分野別取組の振り返りを行い、本県水産業の目指すべき姿である「環境と調和した持続可能で活力ある水産業の確立」に向けた新たな課題及び水産現場の新たなニーズ等に対応できるものとします。特に、近年の漁場環境の変化に対応した各分野の試験研究の強化を中心に見直しを行うこととしました。

加えて、試験研究を効率的に進めるための推進方策も見直し、研究体制の強化と人材育成を図り、研究成果を現場に届けるための基盤を作ります。

なお、見直しを行った「第Ⅲ期推進構想」の期間は、「第Ⅲ期基本計画」と同様に令和８年度から令和１２年度までの５年間とします。

第Ⅲ期宮城県水産業試験研究推進構想（令和３年度～令和７年度）中間見直し振り返り

５ つの主要目標「環境変動等に対応した漁業・養殖生産の安定化に資する調査と技術開発」、「水産業の生産性・収益性向上に資する技術的支援」、「漁海況情報の精度向上及び資源管理の高度化への対応」、「漁場環境の保全に寄与する研究・技術開発」、「海洋環境等の基礎調査」と推進方策「課題の多様化・専門化に対応した試験研究体制の構築と成果の社会実装」について、令和３年度～令和７年度の成果と課題について振り返りを行い、これを基に主要目標を６つに再編し、中間見直しを行いました。

第Ⅲ期宮城県水産業試験研究推進構想（中間見直し）の主要目標と推進方策

第Ⅲ期基本計画で定めた本県水産業の目指すべき姿である「環境と調和した持続可能で活力ある水産

業の確立」とその実現に向けた「４つの基本方向」、関連施策及び重点プロジェクトを基礎にして、振り返り結果を反映して今後５年間の水産業試験研究の主要目標と推進方策を定めました。

【主要目標１】環境変動等の把握と漁場の評価

① 広域的な海洋環境（水温、塩分、有害生物の出現等）のモニタリングと評価、情報提供
② 養殖漁場の環境モニタリングと評価、情報提供
③ 藻場・磯根漁場のモニタリングと評価
④ 内水面漁場のモニタリング（魚種の多様性、カワウ・外来魚被害調査等）と評価

【主要目標２】環境変動等に対応した水産資源を持続的に利用するための技術開発

① 広域水産資源や重要な沿岸資源及び内水面魚種の資源評価と管理方法の開発
② 環境変動による回遊経路や分布域、再生産状況の変化の把握
③ 新たな資源評価対象種の提案
④ 暖水性魚種に対応した新たな漁法の開発と持続的な資源管理方策の両立
⑤ 栽培漁業対象種の放流効果の検証と市場価値が高い魚種の種苗生産技術及び効果的な放流方法の開発

【主要目標３】環境変動等に対応した養殖生産の安定化技術の開発

① 環境変動に対応した既存養殖種の採苗方法や養殖方法、高温耐性種の導入
② 新たな海藻種・貝類等の養殖技術開発
③ 閉鎖循環式陸上養殖等の新技術の研究開発
④ 水産防疫に関する調査研究
⑤ 新規有害生物（赤潮等）への対応

【主要目標４】環境変動等に対応した水産加工原料の確保と利用技術の開発

① 暖水性魚種の加工技術開発
② 未利用資源の有効利用と機能性食品の技術開発

【主要目標５】水産業の生産性・収益性向上に資する技術開発

① スマート水産業の推進に向けた AI・ICT 技術等の導入
② 作業の機械化・効率化のための技術開発
③ 水産加工業者に対する伴走型支援

【主要目標６】東日本大震災に起因する放射性物質のモニタリングの継続と情報提供

① 東日本大震災に起因する放射性物質の検査に係る検体採集及び精密測定の実施

【推進方策】課題の多様化・専門化に対応した試験研究体制の構築と成果の社会実装

① 生産現場からの研究ニーズの事業設計と適切な評価
② 試験研究・技術開発の効率的な実施体制の構築、若手水産研究職員の育成及び技術のスムーズな継承
③ 国、大学、漁業協同組合、水産加工事業者等との連携強化
④ 知的財産の管理及び活用促進
⑤ 試験研究・技術開発成果等の社会実装、情報発信の迅速化及び一般県民へのＰＲ

これらの主要目標と推進方策を第Ⅲ期宮城県水産試験研究推進構想の柱として、令和８年度～令和 12 年度の水産試験研究を推進することとしています。



沿岸漁場環境の調査



タチウオの標識放流



高温耐性系統ワカメ



エイ類の加工技術開発

ホシガレイの循環飼育について

第二養殖生産チーム　主任研究員　森山　祥太

はじめに

水産技術総合センターでは、環境変動対策のひとつとして、比較的安定した生産が見込める陸上養殖技術開発を進めるため、令和６年４月に閉鎖循環式陸上養殖研究棟（以下、研究棟）を竣工しました。本施設では、水温や塩分などの飼育環境を容易にコントロールできる循環飼育のメリットを活かし、ギンザケやイワナ等の養殖試験を行っています。



図１　竣工した閉鎖循環式陸上養殖研究棟

新規養殖種としてのホシガレイ

ホシガレイは、全長 60cm 体重４kgまで成長する大型のカレイで、三陸、 瀬戸内海西部、九州北部に断片的に分布している希少性の高い幻の魚です。需要が最も高いのは 1.5～2kg サイズの大型魚で、夏場の単価が高い時では 2～5 万円／kg で取引されることもある超の付く高級魚です。

本県では、全長 80mm 程度まで育成したホシガレイ種苗を県内の沿岸に放流する、種苗生産技術の開発が行われていました。その技術と飼育水温を容易にコントロールできる循環飼育のメリットを活かして、短期間に陸上で大型のホシガレイを養殖する技術開発に取り組んでいます。

ホシガレイの循環飼育と流水飼育の成長差

令和７年６月に１尾当たり 0.8g(全長 40mm)のホシガレイ稚魚を研究棟に収容し、養殖試験を開始しました。試験は適水温帯で育成する「循環飼育」と、自然水温で育成する「流水飼育」に分けて成長量を比較しました。



図２　ホシガレイ循環飼育の様子

循環飼育の水温は摂餌が良好な水温帯（13～20℃）にコントロールし管理しました。1 年程度の試験養殖の結果、平均魚体重は流水飼育と比べて、循環飼育の方が２倍程度早く成長することが確認できました。

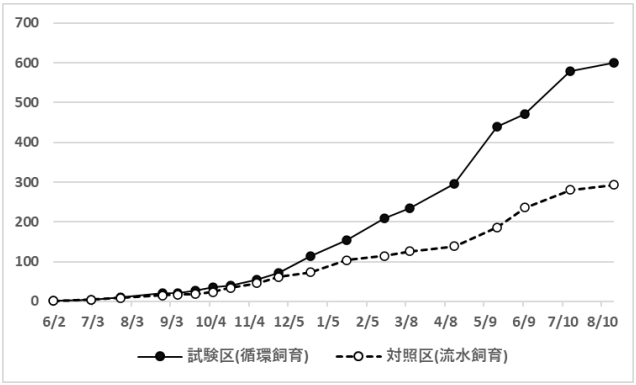


図３　平均魚体重の推移（g）

今後のホシガレイ循環飼育について

大型のホシガレイにどの程度の養殖期間を要するか、引き続き試験を行う予定です。また、今後は、更に効率の良い養殖技術開発として、成長の早い雌のみを作出する全雌化等も検討しています。

仙台湾周辺の異なる水深帯における マアナゴの生活史特性の変動

環境資源チーム　技師　小島　僚将

はじめに

マアナゴは、ウナギ目アナゴ科に属し、沿岸漁業における重要な水産資源です（図１）。日本だけでなく、東アジア全体に広く分布し、韓国や中国でも多く漁獲されています。宮城県の仙台湾では、あなご筒（ハモ胴）漁業と呼ばれる漁業を中心に毎年 400 トン前後漁獲されています（図２）。

仙台湾で漁獲されるマアナゴのサイズは約 30 cm から 80 cm であり、年齢は主に１～４歳の個体ですが、異なる水深帯における生活史は明らかにはなっていません。

適切な資源管理を行うには、仙台湾におけるマアナゴの生活史を解明する必要があります。そのため、本研究では水深別にマアナゴを採集し、生活史の変動を明らかとすることを目的としました。



図１　マアナゴ

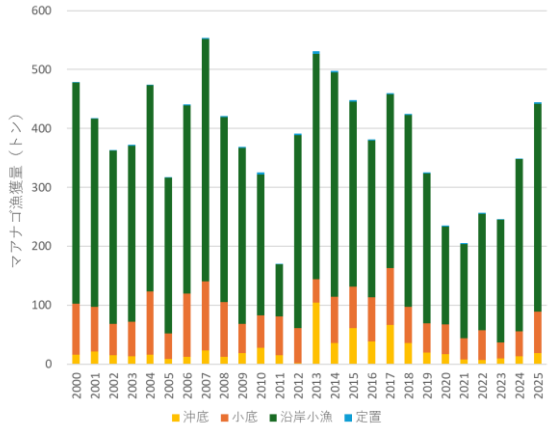


図２　宮城県のマアナゴの漁獲量

調査内容について

マアナゴの水深別の生活史を把握するため、2023 年から 2025 年の７月～１２月において、水深 40 m、60 m、100 m の３地点に生息している個体をハモ胴により採集しました。採集した個体は全長、体重を測定し、肥満度（体重／全長^3×100）を算出しました。年齢査定は、耳石をホットプレートで加熱後、切断し紫外線により観察して行いました（図３）。

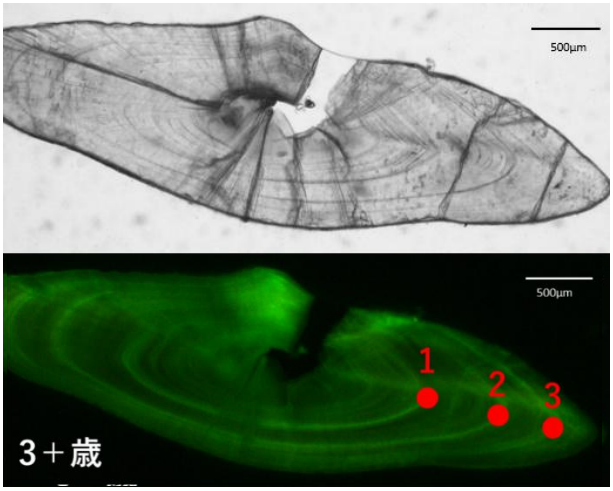


図３　耳石を用いた年齢査定（上：透過光、下：紫外線）

調査結果

（１）全長組成

調査期間中に採集したマアナゴの全長は、水深帯によって明瞭な違いが認められました（図４）。

水深 40 m 及び水深 60 m では全長 30～50 cm の個体が主体であり、平均全長は約 45 cm でした。一方、水深 100 m では主に全長 60 cm の大型個体が採集され、平均全長は 58 cm でした。

全長の分布は、年別にも変化がみられ、水深 100 m では、2023 年には全長 40 cm 前後の個体が採集されませんでしたが、2025 年には全長 40 cm 前後の小型個体も多く採集されました。

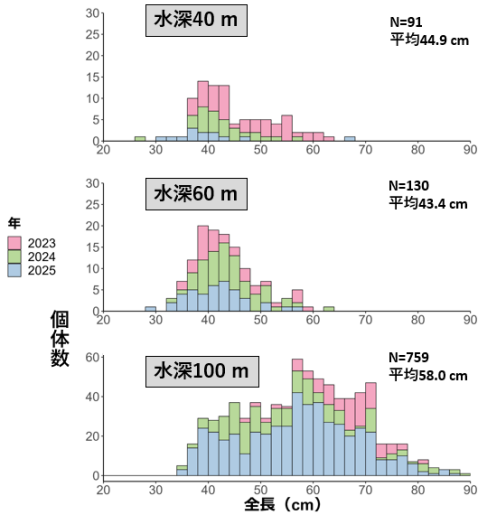


図 4　水深別の全長組成（2023 年～2025 年）

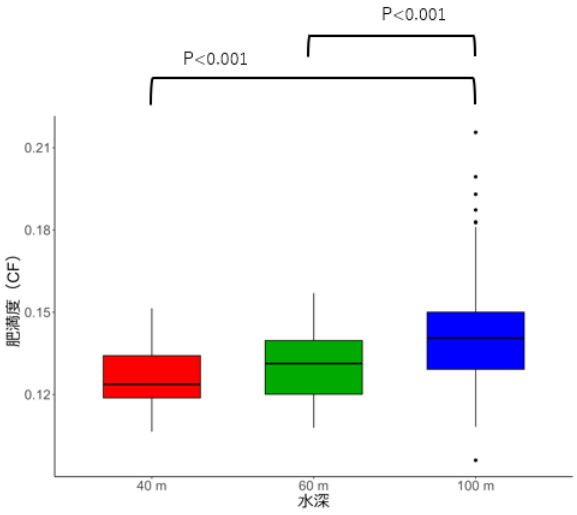


図 6　水深別の肥満度（全長 45 cm から 65 cm の個体）

（2）年齢組成

耳石を用いた年齢査定の結果、採集個体は 1～5 歳で構成されていました。（図 5）。

水深 40 m 及び水深 60 m では、1～2 歳が大部分を占め、3 歳以上の個体は少ない結果となりました。

一方、水深 100 m では 2～4 歳が多く採集され、平均年齢は 2 歳以上となりました。

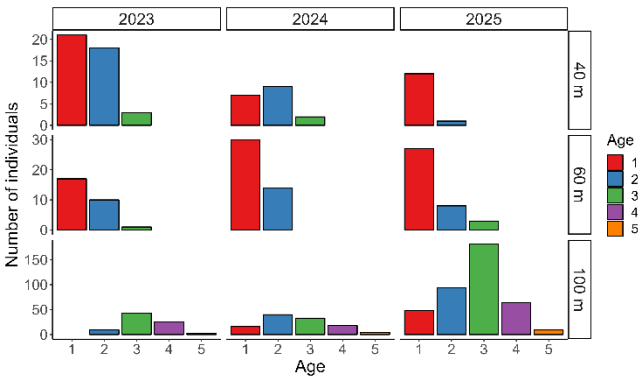


図 5　水深別の年齢組成（2023 年～2025 年）

（3）肥満度

同じ全長範囲（45 cm～65 cm）における水深別個体の肥満度について、水深 100 m で採集された個体は水深 40 m 及び水深 60 m で採集された個体よりも高い傾向にありました（図 6）。

今後の見通し

若齢個体は水深が浅い場所に生息する傾向があり、高齢個体は水深が深い場所に生息する傾向が明らかとなりました。また、2024 年及び 2025 年は水深 100 m でも若齢個体が採集され、年によっては分布域が深いところにも生息する傾向が確認されました。

今後は、このような水深別の生活史の変動がなぜ発生するのか資源状況や餌環境との関係などを踏まえて解明していきたいと思います。

引用文献

1）石川哲郎・鈴木貢治・矢倉浅黄・長岡生真・小山光久・木村博明・髙橋正晴・芳賀晴也・髙松秀樹（2024）2023 年に石巻湾で確認された マアナゴ葉形仔魚の大量来遊. 日水誌, **90**, 355-357

2) Katayama, S., Ishida, T., Shimizu, Y., Yamanobe, A.（2004）Seasonal change in distribution of Conger eel *Conger myriaster* off the Pacific coast south of Tohoku, north-eastern Japan, FISHERIES SCIENCE, **70**, 1-6

宮城県内の河川におけるカワウの食性について

第一養殖生産チーム　研究員　庄子　充広

はじめに

近年、全国各地でカワウ *Phalacrocorax carbo* による有用魚種の食害が問題となっています。宮城県では、1980 年代にはカワウの生息が確認されていましたが、特に 2011 年の東日本大震災に伴う津波により、主な生息地であった海岸林が消失し内陸部に生息域を拡大したといわれており、現在の県内におけるカワウ個体数は増加傾向にあります（図１）。

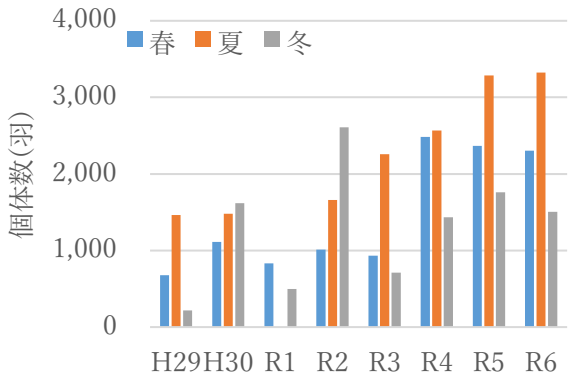


図１　宮城県内の川の個体数の推移

その結果、アユやシロサケなどの放流魚をはじめ、産業的に重要な魚種の食害が深刻となり、食害対策の確立が求められています。

当センターでは平成 29 年度よりカワウの食性調査を行っており、その内容を紹介します。

カワウ胃内容物による食性調査

県内のいくつかの内水面漁業協同組合では、主に銃器によるカワウの駆除が行われています。そのうち一部のカワウについて、当センターで胃内容物を取り出し、出現した魚類を同定して食性を調べています。一例として、令和４年と令和６年の調査結果を見ると（図２）、6～10 月頃まではアユを、11～4 月まではボラを主として食べており、アユ遡上時期にはアユを、それ以外の時期はボラを主要な食物としていることが推定されました。また令和４年は２月にシロサケ稚魚が出現していますが、令和６年は確認されていません。これは近年、サケ放流が大きく減少していることを反映していると考えられます。

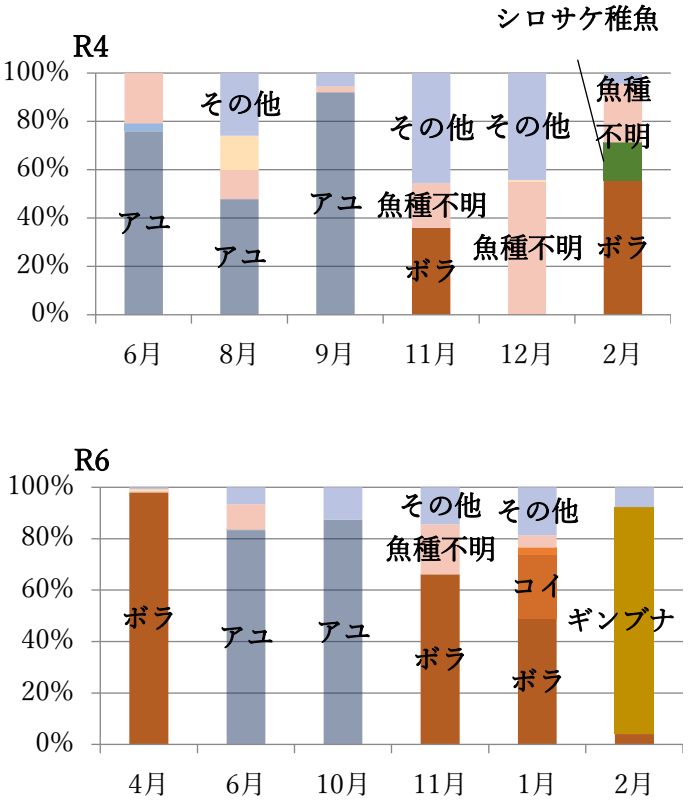


図２　時期別のカワウの胃内容物組

糞に含まれる DNA 分析による食性調査

カワウの胃内容物は、実際に駆除されたカワウから摘出して調査していますが、銃器によるカワウの駆除は難易度が高く、また駆除したカワウが落下して回収できなかったという事例も多いことから、安定して駆除個体を確保することが難しいという課題があります。そこで、青森県で技術開発された、カワウの糞中に含有する DNA を分析して食性を推定する方法を用いて調査しました。

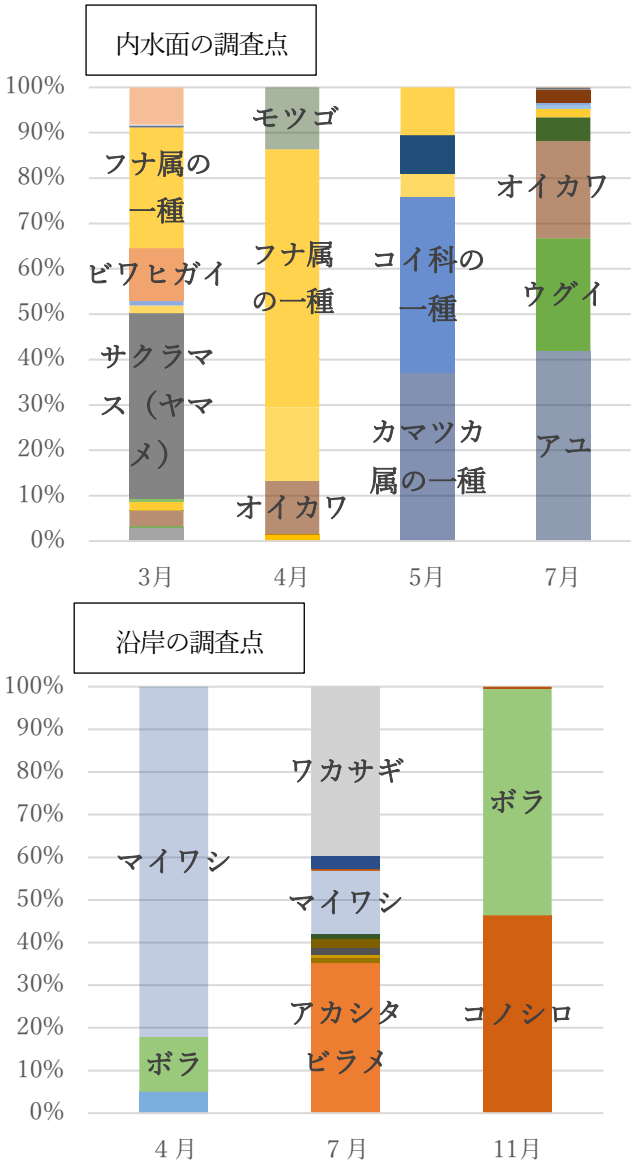


図３　カワウ糞に含まれる DNA から推定された魚種組成（令和７年度）

内水面および沿岸の調査点から糞を採集して分析したところ、内水面からはサクラマスやフナ属、アユ、ウグイ、オイカワといった淡水魚が、沿岸からはマイワシやアカシタビラメ、コノシロといった海水魚が出現しており、いずれも多様な魚種を摂食していました（図３）。

胃内容物の調査と合わせて考えると、カワウは遡上、降河期のアユや河口域に多いボラをよく利用している一方、明瞭な選好性はみられず、他の魚種も多く利用していると考えられました。今後は同様の調査を継続し、より詳細にカワウの食性を把握するとともに、時期によって利用されやすい有用魚種の保護策を検討していく必要があると考えられます。

参考文献

宮城県カワウ適正管理指針ー第Ⅱ期―　令和６年４月　宮城県カワウ対策協議会

青森県産業施術センター内水面研究所事業報告　平成 29～30 年度，2019～2023 年度

高水温耐性ワカメの試験養殖結果について

気仙沼水産試験場地域水産研究チーム　研究員　松﨑　圭佑

はじめに

国内のワカメ養殖は、昭和 40 年代以降本格化し、本県は長く国内のワカメ生産量の上位を保っており、特に令和元年以降は全国一の生産量を誇っています。

一方、近年の海水温上昇により、従来よりも養殖開始時期が後ろ倒しになる傾向があり、最終的なワカメ生産量の減少が懸念されています。このため、海水温が上昇する状況にあっても収穫量等を維持できるような、高水温に耐性のあるワカメの作出が望まれてきました。

高水温耐性ワカメについて

当試験場では、平成 23 年 5 月に気仙沼市階上地区に生息していた天然のワカメから作成したフリー配偶体（基質に付着していない配偶体）を継続して管理・培養しています。この配偶体は高水温環境にあると思われる場所に生息していたワカメが原藻となっているため、高水温に耐性があるのではないかと仮定し、これまで試験を実施してきました。



図１　フリー配偶体の培養

令和４～６年度までの試験結果について

令和４年度に高水温に耐性があると思われる系統（H 系統）の配偶体と、高生長を示すと思われる系統（S 系統）を交配し、室内実験を行ったところ、対照区（S 系統のみを親に持つ種苗）と比較して高い水温帯でも生長することが示されました。

令和 5～6 年度には気仙沼市階上地区と南三陸町志津川地区で養殖試験（育苗～本養殖）を行いました。育苗期間終了後の種苗生残率は、H 系統と S 系統を交配させた種苗（H♂×S♀）の方が若干高かったが、本養殖試験を行ったところ、当該種苗の生長は S 系統のみを親に持つ種苗（S♂×S♀）と変わりないか、若干悪い結果となりました。

令和７年度の試験結果

令和７年度は種苗の配付地区を拡大したほか、気仙沼市階上地区に漁業者の協力を得て当試験場の試験筏を設置し、そこで H♂×S♀と S♂×S♀の試験養殖を行い、詳細に生長を確認しました。

種苗の沖出しは２回に分けて行いました（１回目：9 月 9 日、２回目：10 月 15 日）。１回目の種苗は両者ともに芽落ちしましたが、2 回目に沖出しした種苗はどちらも芽落ちせず順調に生長し、本養殖試験まで行うことができました。

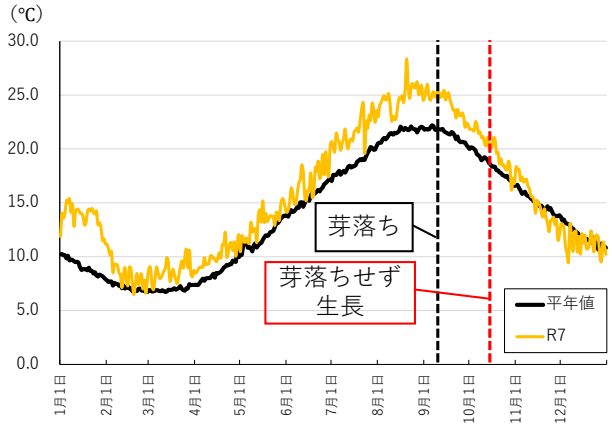


図２　種苗の沖出し時期と漁場の水温状況

本養殖試験を行った種苗については、1～3 月の各月１回、精密測定を行いました。葉長・葉幅は H♂×S♀と S♂×S♀の間に大きな差は認められませんでしたが、葉とメカブの重量は S♂×S♀が平均値で H♂×S♀を上回ったものの、H♂×S♀の方が、計

測した各個体の重量にばらつきが少ない結果となりました。

試験筏の H♂×S♀、S♂×S♀は両者とも３月にサイズが小さくなりましたが、これは同時期の海水中の栄養塩濃度が低下したことが関係しているものと推察されました。

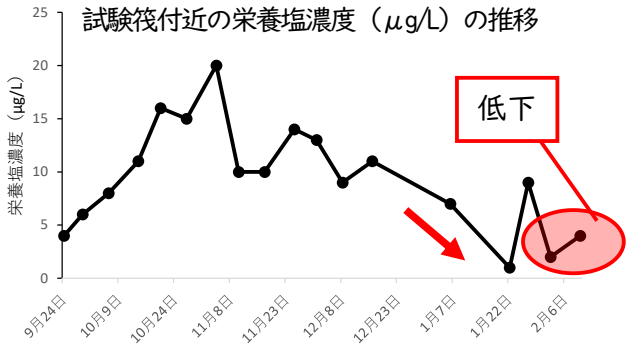


図３　海水中の栄養塩濃度の推移

最後に

現在、気仙沼水産試験場で管理・培養している高水温耐性系統のフリー配偶体には、これまでの試験結果から一定の高水温耐性があると考えられます。

令和７年度の本養殖試験では最終的にワカメのサイズが減少したものの、栄養塩濃度の低下の見られなかった沖合の漁場では生長が良好でありました。今後は、様々な条件の漁場へ種苗を配布しながら生育状況を確認していく方針です。

普及情報

イワガキの人工採苗について

普及指導チーム　技師　深澤　航太

はじめに

イワガキは、マガキと比較して高水温への耐性を有するとされています。

志津川地区のカキ養殖漁業者から、「高水温の影響によりマガキのへい死割合が大きくなっていることから、比較的高水温にも耐えうる可能性のあるイワガキの種苗生産試験を実施したい」との相談を受け、令和 7 年度に人工採苗試験を実施しました。

令和７年度試験内容

令和 7 年 9 月 16 日に切開法により受精卵を確保し、翌 9 月 17 日に浮遊幼生を回収しました。その後、11 月 14 日まで幼生の飼育管理を行いました。

付着の目安となる 300μm 程度まで成長し、眼点も確認されたことから、10 月 28 日に採苗器（ホタテ原盤）を投入しました。しかし、採苗器への幼生の付着は確認されず、採苗に至りませんでした。

先進地視察（島根県隠岐の島）の結果

令和７年度の試験結果を踏まえ、令和８年６月 30 日から７月２日にかけてイワガキの人工採苗が盛んに行われている島根県隠岐の島への視察に行きました。

視察では、イワガキの種苗生産を行う島根県水産振興協会栽培漁業センター及び海士町種苗センターを訪問し、浮遊幼生の飼育管理や採苗方法について説明を受けました。

令和 7 年度に実施した試験方法と比較した結果、主に給餌、換水、原盤投入タイミングに違いがあることがわかり、これらの飼育・採苗条件の違いが、令和７年度に採苗に至らなかった要因の一つである可能性が考えられました。

令和８年度試験計画

令和７年度の試験結果及び先進地視察で得られた知見を踏まえ、令和８年度は飼育・採苗方法の一部を見直し、再度人工採苗試験を実施することとしています。

これらの試験を通じてイワガキの人工採苗技術の確立及び地域での種苗生産技術の普及を目指しています。

表　隠岐の島の手法と R7、R8 試験の比較

	水産振興協会栽培漁業センター	海士町種苗センター	R7試験	R８試験
生産規模	1t水槽×40基	1t水槽×25基	100L水槽×2	100L水槽×2
採卵方法	切開法	温度刺激	切開法	切開法
原盤種類（投入目安）	ホタテ殻（眼点出現率60～70%）	クペール（眼点出現率　50%）	ホタテ殻（眼点が見え始めたら）	ホタテ殻（眼点出現率60～70%）
換水頻度（水槽容量）	毎日（80%）	毎日（150%）	3日に１日程度（５０％）	3日に１日程度（８０％）
餌	５種類（３種⇒４種⇒５種）	３種類（２種⇒３種⇒１種）	２種類（１種⇒１種）	２種類（１種⇒２種⇒１種）

普及情報

アカモクの人工採苗及び養殖技術の普及

企画・普及指導チーム　技術主任主査　宮崎　史彦

はじめに

ホンダワラ類の一年生褐藻であるアカモク *Sargassum horneri* は、県内では天然採取した原藻から加工品が生産され、食用利用されていますが、本県以南にも広く分布し一部他県では養殖も行われている海藻種です。近年、本県沿岸部の海水温上昇により冷水性養殖種の生産不調が生じていることから、当センターでは、海水温の上昇に対応した新規養殖種の一つとして、市場性が期待できる本種について、人工採苗及び養殖技術の普及に取り組んでいます。

陸上での人工採苗及び育苗に関する技術指導

令和７年５月、県内生産者に対し、天然アカモクを母藻、カキ殻を採苗基質とした、幼胚の自然落下による採苗法を指導しました（図１）。幼胚の付着後、ろ過海水を満たした水槽に基質を移して約２週間止水で育苗後、一部を冷蔵庫へ収容して休眠させました[1]。また、残りはそのまま通気と栄養塩添加を行いつつ止水で育苗を継続しました。このほか、当センターではシュロ縄を基質とした採苗も行いました。



図１　アカモクの人工採苗

採苗直後から止水で育苗を継続したものは母藻由来のヨコエビ類混入による食害を受け、７月中旬までに全滅してしまいましたが、８月に冷蔵庫から取り出して新たに育苗を開始した種苗では、食害や芽落ちは起こらず、９月までに藻体長１cm 程となりました。



図２　沖出し時のカキ殻種苗

種苗の沖出し及び本養殖に関する技術指導

10 月に別の生産者の養殖漁場において、前述のアカモク種苗（カキ殻（図 2）及び 2～3cm に切ったシュロ縄、藻体長 1～5cm）をΦ16mm ロープに約 50cm 間隔で挟み込んで水平延縄式とし（沖出し）、本養殖試験を開始しました。

沖出し後のアカモクに芽落ちは見られず、その後順調に生長し、令和８年３月上旬までに、藻体長は



図３　生長したアカモク

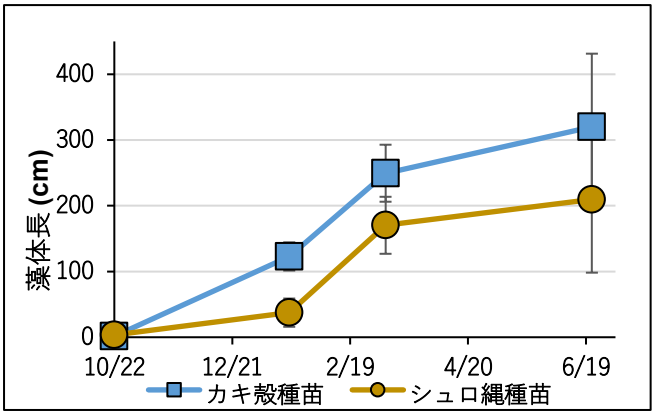


図 4　養殖試験におけるアカモク藻体長の推移
（各 10 個体平均、エラーバーは標準偏差）

カキ殻種苗で平均 250cm、シュロ縄種苗で平均 170cm となりました（図 3、図 4）。

最終計測と収穫を行った 6 月下旬には、一部のアカモクが成熟や波浪の影響により流出したと見られ、藻体長はカキ殻種苗で平均 320cm、シュロ縄種苗で平均 210cm と、3 月上旬までと比べて藻体長の伸びは鈍化しました。収穫したアカモクの湿重量は、カキ殻種苗が 7.0～9.4kg/枚であったのに対し、シュロ縄種苗では芽数が少なく、1.3kg/本 前後でした。また、最終計測時には成熟のピークを過ぎたためか色の薄くなった個体が見られ、今回の結果から収穫適期は県内の天然アカモクと同じく 4～5 月頃と考えられました。

今後の取組

今回本養殖試験に取り組んだ地区では天然アカモクが春先の収入源の一つとなっており、養殖による収入向上が期待されます。引き続き同地区での養殖試験を継続し、収穫量の増大と品質向上に向け、沖出しする種苗の密度や大きさ、収穫の適切なタイミング等を検討していく予定です。

引用文献

1）吉田吾郎・吉川浩二・寺脇利信（2000）低温保存したアカモク幼匹の発芽率と成長．日水誌，**66**，739-740

トピックス

「水産加工品図鑑」の執筆に参加しました



伝統食品技能と新たな製品技術の記録をデータ化して後世に残すため、国立研究開発法人水産研究・教育機構と全国水産加工業協同組合連合会が主体となり、都道府県試験研究機関の水産加工部門において「Web 版　水産加工品図鑑」の執筆・制作を行いました。

本県の主要加工品である塩蔵品、調味加工品、かまぼこ類および震災後に当チームが支援を行った 6 次化商品など、令和 8 年度に Web 上での一般公開が行われています(https://k-zukan.jp/)。

（水産加工開発チーム）

「浜と水試の情報交換会」を開催しました



気仙沼水産試験場では令和８年９月３日に「浜と水試の情報交換会」を開催しました。

試験場が取組んでいる調査研究・普及活動の５課題について、成果報告を行うとともに、漁業者・関係機関との意見交換を実施しました。また、水産業基盤整備課からは宮城県のブルーカーボンの取組について情報提供しました。

当日は管内の漁業関係者、漁業協同組合や水産関係団体の職員、行政機関の水産担当者など約 40 名の参加がありました。黒潮大蛇行収束後の現在の海洋環境や、地域の重要水産物であるアワビ、主要養殖種であるワカメなどが抱える課題について、多くの質問や意見が寄せられました。　（気仙沼水産試験場 普及指導チーム）







トピックス

子どもセンターによる施設見学



石巻市内の子どもセンターの依頼を受け、海の仕事に触れる機会のひとつとして、令和８年８月 17 日に施設見学等の受入を行いました。

参加者は、センター内の研究施設や飼育水槽を見学したほか、魚の年齢が分かる「耳石」の採取にも挑戦。職員の指導を受けながら、熱心に耳石探しに取り組んでいました。

（環境資源チーム・企画・普及指導チーム）

インターンシップを実施しました



当センターでは令和８年９月 16 日から３日間の日程で、３名の学生を受け入れました。

本県の水産業の現状やセンターの業務内容について説明を行った後、魚体測定や栄養塩分析、成果発表会の準備などの実務体験を行いました。

また、漁業指導調査船、種苗生産施設、水産加工公開実験棟など他地区の当センター関連施設も視察し、担当者から業務内容の説明を受けました。

（企画・普及指導チーム）

研究成果発表会を開催しました



令和８年９月 18 日に石巻市で当センターの試験研究成果発表会を開催し、漁船漁業、養殖業、陸上養殖の各分野について、中堅・若手研究員が最新の情報を報告しました。

なお、発表課題や配布資料は、次回の開催（来年９月）まで当センターのホームページに掲載していますので、ご活用ください。

https://www.pref.miyagi.jp/site/gaiyou/seikahappyou.html

（企画・普及指導チーム）

発行：宮城県水産技術総合センター
〒986-2135 宮城県石巻市渡波字袖ノ浜 97 の 6
TEL 0225-24-0130　　FAX 0225-97-3444
https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/mtsc/